

学校を安心できる場所に耕すための 保健室実践からの学び

宮 腰 里 佳

はじめに

食事が十分でない、夜は子どもだけで過ごす、病院や歯医者へ行けない、給食費未納、部活や進学をあきらめる等々。

これは、昨年の六月から八月にかけて、北海道子どもセンターが行った「子どもの育ちと貧困」についてのアンケート調査の内容の一部である。

ここから見えてきたものは、生存そのものに関する大変さや、本当は行きたい、やりたいことをあきらめざるを得ない等、子どもの発達要求、自己表現要求までもが疎外されている貧困の実相に迫るものである。

同じ六月、国連子どもの権利委員会が日本政府に是正勧告を出した。以前にも、日本の教育制度が競争的すぎると

指摘されたが、今回は過度な競争がはじめや不登校、精神的障害、自殺等の原因となり「驚くべき多数の子どもが精神的幸福度の低さを訴えている」「子どもの数が減少しているのに、過度な競争への不満が増加し続けている」とより踏み込んだものであった。また、親子関係の崩壊が子どもに否定的影響を与えていると分析され、日本の教育が高度に競争的であり、子どもの発達の障害物という認識から一歩進めて、日本の社会が、子ども期の崩壊と人間関係の崩壊をもたらしていると指摘している。

親による育児放棄や虐待、子による親殺し、行方不明になつている百歳以上の老人問題等は、新自由主義構造改革の下で、家庭を総体として襲う家族関係や人間関係の崩壊そのものの姿である。

日本の十五歳の子どものうちの三割が感じとっている孤独感。その決定的要因が、子どもと親、教師との間の関係の貧困さという指摘は、学校と保護者、地域との関係性の大切さを問うものであり、困難を抱えている子どもたちの保護者・家族を今後どう支えていくのか等の具体的政策の必要性を求めているとおさええるべきだろう。

保健室は、無料である。子どもたちは、勉強ができてもできなくても、運動ができてもできなくても、身体さえあれば、行こうと思えば行ける場所である。だから、

保健室は、子どものおかれている様子や、学校、家庭、社会のあり方がストリートに見えてくるところなのである。

けがや病気だけではない、人間関係や性の悩み、生活のしんどさからくる不定愁訴等、根深い問題を抱える子どもたちとの何気ない会話から、学校生活と家庭や地域での生活が強く連続性をもったものであると知らされる。生きずらさを抱えた子どもたちに寄り添いながら、今私たちは何ができるのか、何をすべきなのか、若者の就労に関する必要な支援や制度は、等々。情緒的幸福度の低さという新たな困難の登場の中で改めて、教育とは・学校とは何かを子どもから学び、その再構築のために学校・保健室・養護教諭ができることを議論していきたい（砂川市立豊沼小学校 種市倫江）。

一 （共通） 実践報告と討議から

1 保健室からの発信 子どもの実態調査報告

高教組 養護教員部 常任委員会

高教組養護教員部でとりくんだ非組合員も含めてアンケート調査を行ったものをまとめたレポートである。あえて記述部分を多くして養護教諭の実感や事例を記載してもら

う様式のため赤裸々な実態が報告された。発表者は、「具体的に私たちに何ができるのか。」という部分をもとめていたため深まりという部分では十分ではなかったけれども参加者からは、「この調査をまとめたことそのものに意義がある。このまとめを発信することに価値がある」という議論へ発展した。この報告を知ったことで、参加者が自分の勤務校でできることは何か、此の先どのような環境や仕組みを行政機関は構築する必要があるかなど広がりを感じることができた。連携の重要性が語られて久しいが、義務教育の学校では、今何が起きているのか、自分たちが育てた子どもたちは、中学校や高等学校ではどうなっているのか、少し前まで高校生だった現役の大学生とも議論できたことは合同教研ならではの学びの場にふさわしいものであった。本分科会を含めて七つの分科会で同時に発表されたとのことで各分科会の様子も知りたいところである。

二 (分散会) 実践報告と討議から

2 給食指導に生かす縦割り班活動縦割り

阪急色で育まれる子どもたちの関わりを大切に

檜山 ○○小学校 ○

中学校勤務が長かった○先生。「働ける身体と心、その基盤は小学校」縦割り班給食で子どもたちの関わりが育まれた実践の報告レポートである。子どもたちの育ちを愛おしみながら、給食指導がなとなしにしつくりいついていない担任の先生をけっして一人にせず、責めず、ヒタを幾重にも重ねながら実践する○先生。縦割りで給食をとるためには、給食センターに掛け合い、子どもたち（六年生を中心に）にグループを編成させる。経年で子どもたちの育ちを見る養護教諭の確かな目線と、だからこそ多角的に子どもを見る関係性の大切さを訴える。誰も、悪者にしないで、一歩踏み出すその仕組み、子どもを困らない状況におくこと、子どもにプラスになること、その体制作りに自分の力を注ぎたいという○先生の確かな実践が学校全体への取り組みとして広がっている様子が浮かぶようだった。

3 生活リズムと子どもの発達

子ども・保護者・そして自分も

『おもしろい』保健指導がしたい

厚沢部 ○○小学校 ○

しっかりと眠ると勉強が判る。早く眠るとからだは成長。眠っている間に頭をせいりしてくれる!?しっかりと眠るところがおちつく。表紙を飾ったこの言葉。全校児童十三名で、山や田んぼに囲まれた、豊かな自然の中で毎日を送る子どもたち。学童保育の先生との月に一回の交流で、校内での実態交流会で、学級父母懇談会で保護者とともに。気負わずに自然体で『生きる』を基本にしたお話の数々。自分の身体や自分の子育てまで教材にして、けれどエピソードをしめすことももちろんぬかりない。経年で子どもたちの育ちを見ていく養護教諭にしかできない実践の数々である。語り口は、穏やかで暖かだが、冷静な視点で地域の実情をつかみ、落ちているところをつかみ、上からではなく横からも、斜めからも、学校を耕しつつ、しかし耕されているなどと感じさせないのだ。

子を育んでいくことの悪戦苦闘をとともに共感しながら、保護者を巻き込み、保護者をもとめ、教師をくすぐりながらやる気を引っ張り出す実践技の数々だった。参加者が発

表を聞きながら質問し、みんな互いに学び合う。(真似合う。)

4 九年間を見通した健康教育への試行錯誤

保健指導を中心に捉えて

根室 ○○小中学校 ○

小学生十八名、中学生六名の小規模校。勤務二年目の○先生。レポートは、いま感じている養護教諭像と子どもたちへの思いがふんだんにちりばめられたものだった。健康を守りあう委員会活動をはじめ、しつぱ的な指導に終わらない保健指導の模索など発展途上であるが、学校全体の取り組みへ広げようとするフレキシブルな実践であった。

○先生は、からだの素晴らしさや仕組みについて、その素晴らしさを子どもたちが知ったとき、どう変わっていくのか：そんなイメージをつかみたいと話された。この問いに唯一答えることができるのは、それぞれの現場での実践である。今後、多くの方々の実践を見聞きしながら、自分で咀嚼する。いったん自身のものとして納得したときに、仮説が生まれ、それへの創造的な道筋が見えてくる。

○先生がまとめた、からだのしくみとその素晴らしさをまなぶことで、①自分の生活を見つめ、よりよい生活について考えることができる②自分や自分の仲間の体の大切さ

を実感することができ③今よりもよい生活をしようとする気持ちを持ち、できることからやってみようとする「ことができる」このことそのものが仮説としての価値ある表現であるが、今後ここに至る実践を紡ぎ出す仲間として応援し、学びあいたいと思う。

5 ○○農業高等学校におけるピア・サポート活動の取り組み

北海道○○農業高校○

生徒の実態を見える形にするために、まずQIが導入されたこと。教科の先生の授業の大変さがどこから来るのか見える形にすることで教師集団を耕し、戦略を考えつながらいふことからできた実践レポートである。

生徒の実態をみえるものにしたことで校内研修会での議論がはじまりその中から、生徒の力を借りようとピュア・サポート活動が始まったとのことである。保健所による『思春期ピア・サポーター養成講座』に四名の生徒が参加することで始まった活動であったが、普段は見せないような姿を生徒がみせてくれたことで教師の中に仲間が増え下地ができていったすばらしい取り組みの報告であった。たくさん課題を抱えた生徒たちが示された写真によって自信をつけていく様子が伝わってきた。子どもたちの表情が変化

する様子は圧巻であった。またそれを示す〇先生は、本当にエヂュケーター(引き出す人)であることが伝わってきた。

まとめ

今回のレポートは、小学校三本、中学校一本、高校二本であった。例年になく特別支援学校をのぞくすべての校種からレポートが出され議論されたことは、これから自分はどうのような方向性をもって日々の実践をすべきか、考えることとなり意義深いものであった。

特別支援学校の分科会もあることから、特別支援学校の養護教諭はそちらの分科会でのレポート発表を選択しているが一度発表されたものであっても翌年の発表に協力を依頼したり、レポートのみでも持ち帰ることができるようにすることも必要かと思う。特別支援教育がすみ、高校でも支援を必要とする生徒が入学している。しかし、単位を取ることで、具体的な支援を受ける前に非行や、精神疾患、性の問題等で退学や転学する例はあとをたない。特別支援学校での実践の前提と普通学校の前提は大きくかけ離れているが、実は対象生徒は大きく重なり合う面も持っている。校種を超えて学び、取り入れられることは取り入れていく必要があるだろう。

この二日間を通して、議論の底流に確実に流れていたのは、養護教諭になって間もない若い先生も大学生も、校種が違っても、安心して話せること、つながりあえることの重要性であった。どのレポートにも共通していたのは、子どもの実態を見える形にすることで、教師集団をつなぎ、耕すことの重要性、養護教諭にしかできないからだそのものからの発信であった。引き続きこの視点を次年度に生かしたい。

最後に、合同教研の翌日、本校で同僚の複数の教員に「保健室からの発信」レポートを読んでもらった。そのうちの一人の先生が左記のような感想を書いて下さった。

問題を抱えた生徒への対応に、成功したことも失敗したこともありました。その分かれ目は、親との関係の結び方にあつたと思います。担任という立場なので、学校側の姿勢はきちんと伝えなければなりません、親にとって、相応しい現実をつきつけなければならぬということもあります。親と一緒に子どものことを考えたり、親のつらい気持ちを受け止めたりできた時には、比較的うまく物事を進めていくことができました。でも、もしかしたら、これは幸福なことだったのかもしれませんが。どんなに頑張っても連絡がつかない親や、話をのらりくらりとすり抜けてい

く親、学校に対して批判があるときだけ出現する親と対応することが多くなると、こちらも疲弊し、こどものことを考える余裕もなくなっていくます。こども自身が、そんな親を見切って、何とか生きていこうとする気持ちになれば、こちらとしても支え甲斐もあるのですが、そういうことばかりではないというのも現実です。

保健室は、逃げ場のない子どもが避難できる場所だと思っっています。そこで少しガスを抜いて問題を明らかにしたいという思いがあるから、何となく子どもたちはいつてしまおうのだと思います。だから、そこにいる養護の先生方はたいへんだろうなと常に思います。問題の端緒を見つけて、親も含めていっしょに話すことのできるきっかけをくれる場所なので。また、傷ついたこどもに対して話ができる数少ない場所なのかもしれません。また、外部との窓口になつてくれるのはたいへんありがたいです。学校でなんとかしたくても、学校ではなかなかならない問題だつてたくさんあると思います。そのときは、私たちも勇気を持って「できないことがある（できないことのほうが多い）」という自覚をもって、外へつなげていかなければならないと思います。

学校の中でも、外でもつながることが求められている。

つながらないと、どうしようもないことが起きているのだ。誰と、どのようなつながりを持つと子どもにとってプラスになるのかそれを見極める目を持つことが、養護教諭の専門性かもしれない。また、来年も学び続けよう。